



2021.5.10

Vol. 64

北海道サケ ネットワーク Newsletter

発行 阿部周一
事務局 高橋壽一 札幌サケ協議会
〒006-0839

札幌市手稲区曙9条1丁目10-25
Tel/Fax: 011-681-4268

E-Mail: jaytaka@carrot.ocn.ne.jp

URL: <http://salmon-network.org/>

編集 寺島一男

E-Mail: tera2112@potato.ne.jp

各地の桜も開花が一段落し、本格的な春の訪れを感じるようになりました。周辺の花々には、まだたっぷりと雪が残っていますが、日毎に緑の陰影も濃くなっています。

新型コロナも変異株が猛威を振るい、収束の気配を見せていませんが、会員のみなさまにはお変わりありませんか。

世界はグローバルコモンズをいかに守るか、大きな課題になっています。コロナの取り組みを発展させて、この課題に生かしたいものです。 (編集子)

お知らせ



昨年度はコロナ禍の影響で総会を書面会議としましたが、今年度は下記のように開催します。

会議の方式は、集会方式を基本とし、オンライン（ビデオ会議）方式を並行して行う予定です。オンライン方式で参加を希望される方はパソコンなどに Zoom アプリのインストールと連絡をお願いします。

2021 年度総会

1. 日時

2021年6月5日(土)

2. 会場

T K P 札幌駅カンファレンスセンター・カンファレンスルーム 2A(北7条西2丁目 JR 札幌駅北口・代々木ゼミナールのビル)

3. 日程

①北海道サケネットワーク役員会

12:30~13:30 (役員のみ)

②北海道サケネットワーク総会

13:30~14:30

③北海道サケ会議

14:30~17:00

★交流会はありません。

4. 参加費

無料

5. 総会の議題

①2020年度活動、収支決算報告、監査報告、会員現況報告

②2021年度活動計画、収支予算承認

③役員承認

④会員（法人・団体）からの活動概要報告

⑤その他

サケ会議の概要

サケネットワーク創設 15 周年

1. テーマ

サケ資源～いまとこれから

2. 趣旨

北太平洋におけるサケの漁獲量は地域により異なり、北高・南低状態にあります。分布の南限域にあたる日本のサケ漁獲量は、近年減少傾向が続き、とくに最近では日本海側に比べ太平洋側の落ち込みが大きい傾向が見られます。

資源減少の要因として、降海初期の稚魚の減耗、沖合の海洋環境や生物環境の変化などが示唆されていますが詳細は不明です。そこで今回、サケマス漁業の将来を考えるため、沖合資源や回帰資源の現状と資源変動の原因究明を含めた最先端の取り組みや今後の展望について、専門の方々にご講演いただくことにしました。

3. 講演

・「国際サーモン年における沖合サケマス共同調査」

講師：浦和茂彦 氏

(水産研究・教育機構 水産資源研究所 さけマス部門資源生態部 研究等支援職員)

・「北海道における秋サケ資源の動向と今後の資源づくり」

講師：隼野寛史 氏

(北海道立総合研究機構 さけマス・内水面水産試験場 さけマス資源部 部長)

4. 総会討論

司会：河村 博

(北海道サケネットワーク顧問)



EVENT REPORT

サケ出発式とカムイ・ノミ

—旭川・忠別川—

「大雪と石狩の自然を守る会」と「あさひかわサケの会」による、第38回サケ出発式が石狩川支流忠別川で3月28日行われました。

例年よりも気温の低い寒い日が続いたせいか、会場となった忠別川ツインハーブ橋下流左岸は厚い残雪に被われ、ネコヤナギの芽も固いままでした。

幸い好天に恵まれ、旭川チカップアイヌ民族保存会と旭川龍谷高校郷土部の協力によるカムイ・ノミが行われ、出発式も無事終了しました。

旭川では安定していないサケ遡上の一部を補い、子どもたちの教育を目的に、毎年各団体が協力して25000粒の種卵を受領して、人工産卵床への埋設(20000粒)と学校・家庭等における飼育(5000粒)を通じて放流活動を行っています。

この日、コロナ禍を考慮して控えめの取り組みにしましたが、逆に参加者はこれまでにない400人を超える盛況になってしまいました。





SERIES—第6回

サクラマスとわたしたち サケ増殖技術の発展2

河村 博

サケ別枠研究 体制と研究課題

「サケ別枠研究」は5年計画(1977~1982年)で、さけ・ますふ化場と国の水産研究所、道県の水産試験場、大学のそれぞれが、次に掲げる研究課題に取り組みました。もちろん道立水産孵化場も水質関連分野で、水質分析エキスパートの吉住喜好さんと今田和史さんが参加しています。

サケ別枠研究の大課題

1. 河川型放流技術を基盤とした稚魚減耗の抑制(北海道ブロック)
2. 海中飼育放流技術による稚魚減耗の抑制(本州 太平洋ブロック)
3. 増殖効果の安定強化(本州 日本海ブロック)
4. 魚食性サケ属新資源の培養に必要な技術の開発(魚食性サケ属グループ)
5. 幼魚期および接岸期を中心とした沖合調査(沖合調査グループ)

これらの成果すべてをここで触れることはできませんが、当時在職していたえりも支場で取組んだサケ増殖技術の開発に関わる調査研究にからめて、そのごく一部をお伝えいたしましょう。

えりも支場におけるサケ調査研究

えりも支場時代に私を支えてくださった外部の方々がおられます。さけ・ますふ化場調査課長の小林哲夫さんと広井修さん、さらに大学同期の関二郎さんと帰山雅秀くんたちです。これらの方々から「さけ別枠研究」等で得られた新知見や成果など学ぶことができました。えりも支場で7年間、サケ増殖に関する課題に取り組みましたが、これらは地元の協力を得ながら独力で行わざるを得ませんでした。

実施した課題は、海産卵サケ稚魚放流試験、海中飼育サケ稚魚の沿岸環境調査、ハナカジカによる河川内サケ稚魚捕食減耗試験、サケ稚魚放流河川の環境調査、ふ化飼育用水の水質調査のほかに、立体式ふ化器や円形飼育水槽の機能実証実験があげられます。

そのなかでもっとも記憶に残るものが、海産卵とハナカジカに関わる試験であり、これらを実施していくなかで、いろいろ考えたこと、不備であったことなどが、その後の私のサケ増殖に対する姿勢(考え方)の基本になっていったからです。

さて海産卵とは、地元の河川にもどるサケ親魚数がきわめて少ないことから考え出された対応策で、沿岸定置網で漁獲されたサケを活かして支場飼育池に運び入れ、そこで成熟させて採卵する増殖技術のひとつでした。この技術の難点は、使用する親魚の経歴(産まれた川)が不明な

こと、海水から真水に直接移動させるストレスの成熟や発生への影響、回帰性の評価などです。標識する部位(ヒレ)が残されてなく、臀ビレを切り取ることになりました。正確な標識数を割り出すために作業当日の標識率に加えて、いろいろな切り方をした稚魚を2年間真水飼育してヒレの再生率も調べました。

放流して3~5年後に多くの標識サケがもどり、海産卵の効果を明らかにすることができましたが、サケの生態に基く増殖事業を進めるうえで、系群(産まれた川)が明らかでない種苗を用いることには課題が残りました。ハナカジカに関しては、紙面の都合により別の機会に譲ることにいたします。

サケ別枠研究が生み出した 増殖技術の概念

さて「サケ別枠研究」からは大きな成果が生れています。そのひとつは、増殖技術における新しい概念、すなわち「健康な種苗の育成、沿岸環境の適正時期放流、親魚の回帰時期に基く資源造成(期別資源造成)」が確立されたことです。

1970年代から回復し始めたサケ資源は、その後確実に増加して、1996(H8)年には史上最高の5,750万尾(全国では8,880万尾)に達しています。

(北海道サケネットワーク顧問
・元.北海道立水産孵化場長)

Information



会報のご活用を!

北海道サケネットワーク会報第12号(2020年10月)が、ホームページにアップされています。

本会の浦野顧問の尽力によるもので、サケ資源の動向、2019年度サケ会議要録、会員の活動、2019年度総会議事録、会員・役員などが掲載されています。

今号の特集は、「日本系サケ資源の変動」で、2010年以降顕著に減少し続けているわが国のサケ資源の状況と動向が、統計資料を含めて詳しく紹介されています。

資源変動の要因と考えられている海洋環境の変動を理解し、関係者がどのように資源回復に向けて取り組んでいるかを知る上で、とても役に立つと思われる。

また、最新のサケに関する情報や文献・資料、サケネットワークに参加する会員の活動などが、多岐にわたって紹介されているホームページも、併せてご利用下さい。

